
空の飛び方

蘭気流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の飛び方

【Nコード】

N5626N

【作者名】

蘭気流

【あらすじ】

発展と崩壊を続ける世界、人類は文明を築いてもいずれ壊滅してしまう。

過去と今と未来、3つの時間。

選ばれたアスルは原初の力で過去に起源をつくり、現代で方向を修正し、未来を築く。

アスルに与えられた使命はいずれ来る災厄を無くす事。

過去と現代を行き来して未来を変える！謎解き世界創造ファンタジー、開幕です！

序章：世界の創造（前書き）

実際の歴史ネタや時事ネタパロを含む事があります
苦手な人はそれを承知の上で読んでください。

歴史ネタについてはこの小説で興味を持って実際の事象について調べて知識にしていただけだと
偏食歴史好きの願いももっています。

もし少しでも興味をもっていたらgoogle先生に聞いてみてください。

序章：世界の創造

序章：世界の創造

- - - - -

ライト兄弟は機械という文明の力で空を飛んだ。

魔法使いは魔法という未知の力で空を飛んだ。

鳥は生きる為という進化の力で空を飛んだ。

- - - - -

123年に1度二つの月が夜空で重なる、この日だけは文化や言語を越えて世界がひとつになる重月祭が行われていた前回の重月を見た者はいない。

いわば都市伝説として子、孫へと語り継がれた伝説だった、今宵全ての人々はそらを見上げ、その時を待った。

そして皆が待ち望んだその時はすぐにやってきた。

夜空に紅く輝く紅月と、青く光る蒼月が頭上で交錯する。

…この選択でいいのだな…

その時だった…鳴り響く轟音、割れゆく大地、途切れぬ悲鳴、沈みゆく文明、わずか一夜にしてこの世界の文明は水の下へと姿を消した。

それから神々さえも気が遠くなるほどの時間が流れ、またこの世界に人類が現れた。

∴ 彼らはまた同じ過ちを繰り返すのか∴

赤い月と青い月に導かれる物語

序章：世界の創造（後書き）

章単位で時間があればすこしずつ更新していきます。

まずは数章書けるまで紹介を兼ねた序章のみの公開（後書き更新時）になります。

長くグダグダになるのも嫌なので章単位では短めを想定しています。

誤字脱字他感想等お待ちしております。

1章：世界の仕組み―選定

1章：世界の仕組み―選定

…汝に今より世界の鍵を与える今度こそ成してみせよ…

「わつ、誰！？何！？」

「はいはいアスル、今日はどんな夢を見てたんだい？」

女性の一言で周りからドッと笑いが零れる、ふと周りを見渡すとみなれた光景が広がる、普段の古臭い一室に何人もの人が学んでいる。

「夢…なのかな」

そう呟きアスルが席につくと間もなくして終業を告げる鐘が鳴る。

「はい、それではここまで。明日は狩り日だから各個準備を怠らないようにね」

そう女性が言うのと、子供らは一斉に部屋を飛び出して行った。

「はうー…今日もやっと終わったわ…なんで私が子供たちの先生なのよ、私には王子様に連れ去られて…」

女性はそこまで言って我に変える、まだ1人部屋に残ってる子がいた、アスルだ。

「へえー、先生…いやリサーナさんはお姫様にでもなりたかったんだ」

そう嘲笑うかのようにアスルが言うと続けてリサーナは答えた。

「わ、悪かったわね！あたしにだって夢とかあるんだから！」

すでに恥ずかしさで煮えたぎってるリサーナは普段と違う空気に気付くのに少々時間がかかった、いつもなら終業の鐘の音と共に部屋を飛び出し遊びに行くアスルが独り部屋に残ってるのである。

「あなたこそこんな所で何してるの？先生に何か相談かしら？」

リサーナは恥ずかしさをアスルへの疑問と不安で押し殺した。

「べ、別になんでもねーよ！じゃあな先生、明日は俺が特大の獲物獲ってやる！」

そう叫ぶとアスルは荷物をまとめて窓から飛び出していった。

「アスル……」

少しの不安がよぎったがリサーナはその場を後にした。

「おいアスルおせーじゃねーか！」

燃えるような真紅の短髪を風になびかせながら長身の男が声をかけてくる

「え、お前誰だっけ？」

「おいおいこのモシヤ様の事を忘れたのかい？」

「もうモシヤもアスルも茶番は良いからさっさといつもの所いこうよ」

またそれが、と言わんばかりにモシヤと一緒に待っていた子が止める。

「まったくウイズは黙ってれば可愛いのに」

一瞬の間、アスルがその場から離れると綺麗な蒼い長髪を逆立てたウイズがいた。

「モシヤ……」

アスルはモシヤの命を社交辞令程度に案じながら距離をとった。

鈍い音と落雷のような轟音が鳴り響く、静まり返った後少し時間を置いて元いた場所に戻ると案の定ウイズの足元に倒れるモシヤがいた。

「ウイズ、手加減してやれよ」

「ふんっこの馬鹿が悪いのよっこのっこのっ！」

可愛くないと言われたのが感に障ったのか横たわり痙攣するモシヤ

をウイズは何度も足蹴にした。

「ふたりともそろそろ行こうぜ」

見飽きたアスルが二人を置いて歩き出すと、ウイズはすぐにアスルを追い、モシヤはゆっくり立ち上がると二人の後を追った。

学校を東に少し行った所、普段は狩り日に人が入る程度の場所でも誰もいない、小道を少し歩いた先にある小高い丘、普段その上は狩りの拠点にする事も多い。

しかしアスルたちは探検と称して丘の反対側に行ってみる事にした、その時見つけたのが丘の上からだの木々で確認できないこの小さなほら穴だった。

「ねー、アスル、モシヤ今日は奥までいくの？」

「なんだウイズ怖いのかー？ビビってチビるなよ？」

「な！？なによ！！ここに、怖いだなんて言っていないでしょ！」

「ウイズ声震えてるって」

「ちよつとアスルまで！ふざけたただけだってば！」

ほら穴に足を踏み入れた3人は会話の内容とは裏腹にそれまでより足早に奥に向かっていく。

入口の前を覆っている木々の影響か、少し歩いただけで当たりは一面の黒世界となった。

「ウイズ、チビるなよ？」

ボワッ

「あつつあつつあちちち！ちよつとウイズふざけんな！」

「アスル行きましょここに運良く自動歩行型のたいまつがあるわ」
必死に髪に付いた火の粉を払う、完全に燃えうつる前に消化したが、後頭部の毛先は完全に縮れていた。

「ウイズおまえな！」

「なによ、あんたが余計な事ばっか言ってるからでしょ」

「ただの冗談じゃねーか！」

「そうだね、そんな冗談でも言っていないとダメなぐらい怖かったん

だ？」

ガサッ

「ガサッじゃねーよ何言ってるんだよお前」

「何よ”ガサ”とか言ってるないから！」

言い合うモシヤとウイズ、お互いににらみ合う。

「…アスル？」

少しの沈黙、それを破ったのはモシヤだった、ふと気付けばアスルがいない。

ガサガサッ

「え…何の音？」

さっきモシヤの聞いたであろう音、今度はウイズも気付いた、急に不安が込み上げる。

「アスル…？」

小刻みに震えながらウイズが問いかけるも音から返事はない。

「安心しろ、お前は俺が守る」

いつの間にかモシヤに張り付くウイズ恥ずかしくて少し距離を取るもすぐにモシヤに抱き寄せられてしまった。

「だ、誰かいるのか？」

モシヤの声も震えている、もちろんその事に気付いている。ふと恐怖の影にここが暗いほら穴の中で良かったとウイズは思った。

その時だった。

「ヒヤッ!？」

ウイズが突然甲高い悲鳴を上げる、恐怖におびえてたせいか悲鳴もすでに声になってない。

「どうした・・・!？」

ウイズを見たモシヤは固まった、暗闇の中でウイズがはっきりと見えるそれはウイズが発光してる事を意味した。

「なんだこれ!？」

モシャがウイズに問いかけたとき、ふと気付いた、ウイズの身長が
高くなっている、否宙に浮かんでいる。足が地面からすではつき
り分かる程浮いていたのだ。

「ウイズ!!」

叫んだ瞬間にモシャはウイズを抱き締めた。

「モシ…」

口を開いた瞬間、二人の体は完全に光に包まれた。

おしらせ。

バックアップから続きを書き直してましたが、当初予定していた構成を書いていくには

この度の震災と照らし合わせ、不謹慎と思われる描写が多数回避不可能なネタとして盛り込まれる事に気付き、完全に闇に葬る事になりました。

約半年も間があき、楽しみにしてた人などいないと思いますが、もし自分の今後の作品を見た人がこれの続きは？とかなると行けないので書いておきます。

（いや、消せばいいんですけどね？なんとなく…）

世界規模で起きる終焉の災厄（地震）をまったく別の物に書き換えれば続けれそうな気がします。

突如魔神とかでてきても作品としてどうなのってなりますし…

文明が海に沈む

これが最初の出だしでも描写されてるように、終盤で”結局は回避不可の現象”だったのかといった形で地震、そして津波の描写を予定していたため今回の決定に至りました。

また自分の作品を見ていただける機会がありましたら、その作品でよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5626n/>

空の飛び方

2011年10月6日14時14分発行